

&lt;講演&gt;山上国際学寮

# 「平和をつくり出す人たち一心の中に平和を」 講演記録

近藤 絃子

私は弟が2人で妹が2人いるんですけど、弟の1人が学生時代に富坂学生寮にいたんです。それで月に1回ぐらい暇な人がいたら、私の仕事は虎ノ門でしたが住んでいたのは高田馬場だったので、「今日は中華食べに行こう」と言ってみんなを呼んで食べに行ったりすることがあったので、今日はとても嬉しいです。よろしくお願いします。

1945年8月6日。その日は、とても綺麗な青空だったそうです。実を言うと、私は8ヶ月の赤ん坊。その日は朝早くから父は、どなたかの娘さんの結婚衣装を戦争中だったのでそれをどこかに疎開させたい、焼けてしまったら困るので、その日は空襲警報が解除になったのでリヤカーに乗せて押しながら、ちょうど今平和公園があるところを通り己斐という山に行きました。あとで父に聞きますと、着いた時にすごく強い爆風に吹き飛ばされたそうです。何があったのか分からない。まず叩きつけられた時は「しまった。やられた」と思い、恐る恐る立って足を触りました。「足大丈夫？うん、手も大丈夫。うん」でも、何かよく分からない。広島はデルタ地帯なので、その山の上からちょうど広島の町が全部見えます。そして、そこであっちでもこっちでも火が上がっているのが見えました。

父は日本人ですが、関西学院大学の神学部に行って牧師となったんですけれども、その後奨学金を手に入れてアメリカに留学しました。まだ第二次世界大戦が始まる前です。アメリカのエモリー大学、カーター大統領と同じ学校なんですが、そこの神学部に行って日本に帰ってきていました。彼は広島に原爆が落ちる1年前に、沖縄から広島に移動してきました。というのは、沖縄で牧師をしていましたけれど段々難しくなるので、先輩の牧師先生や学校の先生たちが、ちょっと広島に行って少し身体を休めた方がいいんじゃないか、ということで広島に移って流川教会の牧師になりました。

アメリカにいた時は、まだ戦争が始まっていなかったなので、彼は8月6日を体

験している、そのことはやはりアメリカ人は知るべきだという想いがきつとあったんだと思います。1年半後にはすぐアメリカに渡って1年と6ヶ月、いろんな教会や学校を回って原爆の話をしていました。

ここに1冊の本があります。『ヒロシマ』という本です。これはジョン・ハーシーという方が書かれた本です。このジョン・ハーシーは、ご両親がアメリカの方なんですけれど宣教師として中国に行って、そこで育ちました。そして、広島に入ってくるのはとても大変だったんですけど、色々な手を使い、人の助けを得て広島にいらっしまいました。実を言うと『ヒロシマ』の本と同時に『ザ・ニューヨーカー』という雑誌にもこのジョン・ハーシーの『ヒロシマ』を載せたかったのです。私、ここの話が大好きなんです。『ザ・ニューヨーカー』という雑誌は、普通は本を全部載せることはしないで1/3か1/4を8月に出したら、次の月にはそのあとの1/3を、と順番に連載していく計画を立てました。そこで、雑誌社の社長と編集長とジョン・ハーシーの3人の大の男が内緒話。これを連載で出して、1/3をもしアメリカの政府の誰かが読めば、アメリカがそんな爆弾を広島という町に落とすとしたということが分かれば、読んだ人たちがアメリカ政府の取った政策についてこれはおかしいんじゃないか、そんなものを落として、というような批判が出るのではと思いました。もしもそういうことになったら、きつこのあとは出版させない。それを感じたこの3人は、いっそのこと1冊の本全部を雑誌に載せてしまったら、もうアメリカ政府の誰かが「いや、こんな本を出されては」と言っても、「出版してはならぬ」と言うかもしれないけれど、さっさと出しちゃったからもう手遅れ。ということは、実はその3人はそれが出たらすぐ雲隠れしたそうです。だから自分の大好きなお母さんにも、いま僕はどこどこにいますなど一切言わずに。そして雑誌と、本としてアメリカで出版されました。例えばアインシュタイン、アインシュタインは本（『ヒロシマ』）と『ザ・ニューヨーカー』という雑誌を確か2000冊かな、自分のポケットマネーで買って自分の知っている科学者にこれだけは読んでほしい、これだけは読んでほしいと、みんなに渡したそうです。ですから、アメリカの人たちはもう出ちゃったから、みんな読み始めました。日本語にはなったんですけども、あまり読まれていません。

この本については色々なことがあるのですが、まず面白い話からいきましょう。私がジョン・ハーシーに最初にお会いしたのが8ヶ月。あ、ごめんなさい。1歳の誕生日が過ぎていたので1歳の私。ということは彼のことを何にも覚えてない、

それで次に会ったのが40歳でした。父とジョン・ハーシーはずっと文通をしていました。この本には女性2人、お医者様2人、そして宗教家、1人はカトリックの神父さん、ドイツ人の方です。もう1人が私の父。この6人がこの本に出てきます。8月6日をどうやって過ごしたか、ということが書かれています。この本を書くにあたってジョン・ハーシーはいろんな人に出会うのですが、まず神父様にお会いしました。そうしたら神父様が私の父を紹介したらしいのです。

私の父は関西学院を出て牧師になるんですが、さっきも申しましたように沖縄で牧師をしていて広島に移って1年経つか経たないかで原子爆弾に遭うんですけども、父・谷本清は、急いで1年後にアメリカに講演旅行に行きました。彼はアメリカの神学校も出ているので英語はできる、友達はもうみんな牧師になっているので、とにかく1年半講演をして回りました。いったん日本に5ヶ月帰ってきて、またアメリカに講演旅行に行きました。そんな父ですから、私が小さい時は父はいない時が多い。私のすぐ下の弟は、父が1年半経って日本に帰った時、もちろんその当時ですから船で行って帰ってきたんですけど、父は弟を抱き上げたかったから急いで抱こうとしたら大泣きしちゃって、そうよね、会ったことがない人なんだから、見たことがない人なんだから。のちに私が大学時代に色々調べたら、どうも父はブラックリストに乗っていたみたい、危険人物です。ま、そうよね、広島のことをみんなに話して回っていたんですから。

ジョン・ハーシーはこの谷本清という人に会いたかったのです。訪ねていらっしやったんですが、父はその時には朝早くから家を出て、被爆した人が困っていたらその人のところへ行って、できることは何でもしますからとお話を聞いていましたので、家にいませんでした。ジョン・ハーシーが来た時は母親が対応しました。彼は、是非ご主人に会いたいので私の名刺を置いておきますと名刺を置いて帰られました。その名刺には、『ライフマガジン』と『ザ・ニューヨーカー』だったかな、2つの記者となっていました。その日の夕方、父が出先から帰ってきて、母が今日はジョン・ハーシーという方がいらっしやったということを伝えました。父は「わあ、是非会いたい」と。いろんな記者が会いにいらっしやるけれどアメリカ人では初めてだったのかな？それで是非会いたいと。ところが、ジョン・ハーシーがどこに泊まっているのか分かりません。広島町の町は全部焼け野原になったから、どこに泊まっていたら分かるか分からないから父が尋ねることもできません。それで「そうだ、手紙を書こう」と、いろんなところを探したら、たまたま白い紙が見つかりました。これはすでに何か書いてあるような紙でしたが、裏を

使って8ページか9ページの手紙をそのまま書きました。というのは、次の日の朝早くまた出かけるので。

ジョン・ハーシーは晩年というか、ある程度経ってからかな、イエール大学の教授をしていらっしゃいました。今から10年前、お孫さんがイエール大学へ行って調べました。ここに父が書いたその手紙があります。一番最初のページを見ると「失礼しました。実は明日の朝、私は朝早く家を出てまた広島の新爆者のお手伝いをしないとイケないので。時間は今しかないです」という手紙です。あとでお見せしますが、なんて言うのでしょうか、単語を変えたり、文章の言い回しを変えたり、もう本当に下書きのような手紙です。でも彼には時間がないので「どうかお許してください」と、この9ページかな、手紙と地図まで書いてジョン・ハーシーがいらした時に渡してくださいと母に託して、父は朝早く出かけました。

10年前、ジョン・ハーシーのお孫さんが私に会うためにいらっしゃった時、みなさん、プレゼント好き？私は大好き。その時のプレゼントはこのオレンジ色のファイルでした。これをくださったの。閉じた状態でもらったから、さっと開けた。びっくりした。父の手書きの筆跡がちゃんと私でも分かりました。この手紙は本当に下書きのような手紙だけど、父としては伝えたかったんでしょ。あの8月6日がどうだったか。それから父とこのジョン・ハーシーの友情がスタートしました。

実を言うと、ジョン・ハーシーと父の映画を作ろうと、2年後の完成に向けて今頑張っております。というのは、確かに、例えばあのオープンハイマーの映画はできましたよね。でも広島・長崎のことは全然表していないので、アメリカ人の知っている人たちが、やっぱり原子爆弾を使ったらどういうことになるかということを知らなきゃ、知らせなきゃいけないと、今その映画にかかり始めたところです。ところが、やはり2つの国が関係して作るものですから、監督はアメリカで、今から配役を決めたりするんです。お金がいっぱいかかります。でも、そういう中でも作ろうと思っていられる人がいるということは、私としてはとても嬉しく思います。

そして戻りますけれど、このジョン・ハーシーの『ヒロシマ』。私は小さい時からこの人に会って来たかったです。会っているのですが、その時は赤ん坊なので話していないから何も覚えていない。次に彼が日本に来たのが40年後。そして私は、彼に対してこう言いました。“I am not a boy, I am a girl.” 私は男の子じゃない、私は女の子だって言ったら、それだけで彼が「コウコ（絃子）、本を持って

いるか」「イエス、持っていますよ」それでこの本を彼に差し出しました。そしてこの本の1番最初のページ。“For Koko Tanimoto——”私はその時は結婚していたのですが、日本語の名前を覚えるのは外国人にとってとても大変です。「谷本」までは父との友情があるのでしっかり頭に入っているけれど、結婚した私の相手の名前「近藤」はなかなか覚えられないから、仕方ないから、線を引いただけです。“Who stand out in this book as an error for which my apologies. page 41 and warm wish. John Hersey”と私宛てに書いて、この本の中で唯一間違いがある、そしてその間違いはちゃんとボールペンで線が引いてある。心よりお詫び申し上げます。そしてサインしているのだけれど、私としたら41ページが気になって「すみません。41ページを読んでいいですか」と彼に聞いたら“Of course”もちろん、すぐ開きました。これを見た時、嬉しかった。“She was caring …,” 「She」は私の母のことを言っているのですけれど、“She was caring their infant son.” “I am not son.” そう、彼はここの「サン（息子）」のところもボールペンで消してくれてページの一番下に「daughter」。ということは、この本はアメリカで有名な本ですが、最初の40年間私は男の子でした。それで面白かったのは、広島に住んでいたころ、海外から広島に多くの方がいらっしゃるんですけども、ある集まりで弟と一緒にその会に出た時、1つのグループの中の男性の方が走るような感じで我々の方に向かっていらっしゃるんです。「あ、この人来るな」と思っただけで一応期待はしたんですけど、そしたら彼は私の方に来ると思ったら私の方に全然来ない、弟の方に行ったのです。弟に「君だよ。ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』に出てくるのは」と、すごく喜んで言っているわけ。弟は“Not me, that is her”それは僕じゃなく彼女だって言ったのです。40年間、私がジョン・ハーシーに会うまでの40年間には私はずっと男の子。でも会って初めて、最近出たものには、きちんとページ上には女の子と書かれています。嬉しく思っています。というわけで、本当にジョン・ハーシーの本はよく読まれました。1999年、20世紀の最後、ニューヨーク大学の学生たちにこの20世紀に1番心に残った本や雑誌は何ですか？というアンケートを取って、100冊の本の名前が上がりました。新聞にも出たんですけど、『ニューヨーク・タイムズ』、『ザ・ニューヨーカー』に出ました。オープンになっているいろんなアンケートに本の名前が書いてあり、ナンバーワンに上がったのは、やっぱりジョン・ハーシー、1番忘れることはない、ということまで有名なんです。

そこで段々に本筋に戻っていきます。8月6日、私は8ヶ月の赤ん坊でした。父は牧師でしたので私は牧師館に住んでいました。あの日、先ほど申しましたようにとても綺麗な青空。そして父はいろんな人に何か困っていることはないかと聞きながら、朝早くから出かけていました。家には私の母と私だけ、朝の8時ですからやっと起きたか起きていないか、まだ寝ていたのか、そこまで分からないんですけど、教会員の1人が母を訪ねてきました。母は、この子を抱いて話した方が、もしも途中で泣かれても困るからと私を抱いてその方と話をしました。そしたら一瞬にして家が完全に潰れてしまう、家が潰れるっていうことは窓も全部潰れているから光が入ってこない。母の頭の上にはいろんなものが落ちてきているから意識が朦朧としてきます。あとで聞いたら、赤ん坊が泣いている声を聞いたような気がすると言っているんですけど、それは一体私の声だったかのどうか分からないんですが、それを聞いたと。そして意識が戻り、自分が娘を抱えていることに気がつきます。ところが、抱いて家が潰れたため母の体重はすべて私の身体の上に覆いかぶさってしまっていました。すると今度は私が呼吸できない。まず母は、気がついて祈ったそうです。「神様、私はどうなってもいいんです。神様、この子だけはどうぞ助けてください」その後、とにかくそこを出なきゃいけない。一番最初にとった行動は助けを求めること。「誰か助けてください、谷本紘子はここにいます。どなたか助けてください」自分の名前は「チサ」。「谷本チサはここにいます。どなたか助けてください」もう一生懸命声を張り上げて叫んだけれど誰も来ない。そんなことをしていると、抱いていた子供が息ができていなかったもので早く外に出したいと、片手で私を抱き片手で穴を掘って、そこから外に出ました。そしてもちろん下駄も何も履くものはないので、裸足で急いで家の近くにあった縮景園という所へ、何かあった場合は町内の人はみんなそこに行くようになっていたので行きました。

小さい時から、父の部屋というか、トイレに行く時もある部屋を通らないとトイレ行けないその部屋には、原爆の写真がいっぱい飾ってありました。夜トイレに行くのが怖くて、お父さんはこんな写真ばかり飾ってとすごく思っていました。

3歳になった時、教会に多くの子供たちが来ました。私は生意気なものだから、「え、大人はどうしたんだろう」誰も大人が付き添っていないということに私はすごく疑問を感じて「大人はなんで子供に付き添って来ていないんだ」。そうしたら、どうもその子供たちは当時確か4年生より上、3年生か4年生の子供たちより上の子で、担任の先生と一緒に田舎に疎開してきた子供たち。というのは、田舎に

行けばまだ食べ物があるということで先生と田舎に行き、そこで生活をします。8月6日子供たちは郊外にいたから助かりましたが、問題は親御さんたち、おじいさん、おばあさん、または兄弟、広島町の町にいた人はみんな亡くなって孤児になってしまいました。

父はやはりその子供たちのことをとても案じていて、最初の講演旅行で彼は友達に自分がやりたいこと、病院も作らなきゃいけない、カウンセリングセンターも、いろんなことを大学で一緒に学んだ友達に訴えました。「そうか、分かった。パール・バックに会いに行こう」パール・バックってご存知ですよ。彼女はアメリカ人ですけど中国で大きくなって、『大地』という本を書きました。2人はパール・バックに会いに行きました。そして、パール・バックは父の話全部聞いて「はい、分かりました。谷本さん。では、まず子供たちを助けましょう」と言ってくださり、アメリカの1家族が1人の子供を、お父さん、お母さんがクリスマスにはクリスマスカード送り、誕生日には誕生日カード送り、父としてはどうかその心の中に少しでも明るい想いが宿るよという気持ちで、精神養子縁組を始めました。だから、その子供たちが教会に来ている時、私だけ親がいる。「ははあ、うちの親は私をどこかで拾ってきたんだろうな」とずっと思っていたんですが、それは違うみたいで、やっぱりあの人たちの子供だったらいいんです。

今度は私が5歳の時、中学生、高校生のお姉さんたちが集まってきたある日、1人のお姉さんが髪の毛をとかす櫛を探してきました。広島町の町はもう本当に全部焼け野原なので、私は櫛なんて見たことがなかったんです。そうしたら1人のお姉さんが、櫛をどこかから探してきて私の髪をすいてくれました。「え、櫛ってどんなだろう？」彼女が髪を解いてくれた時、お姉さんの櫛を持っている手を見たかったので、そっと櫛を持った手を見ました。指が全部ついたまま、「え！」びっくりした。お姉さんの中には頬が額についたまま瞑ることもできない、唇が顎についたまま、どうしたんだろう。でも、5歳の私でも「お姉さん、その手どうしたんだ」とか、そんなことをお姉さんたちに聞いてはいけないことは分かっていました。だからそれは一切聞きませんでした。ただし、お姉さんたちはみんな違う学校から来ているので、自分たちで自己紹介をしていました。それを、私は耳を象さんの耳みたいに大きくして一生懸命に聞きました。そうしたら、たった1つの爆弾が広島町の町に落ちた。びっくりした。私は大人になった時に絶対この敵を討つ。見つけ出して、エノラ・ゲイという飛行機に乗っていた人たち、あの人たちさえ落とさなければこんなことにはならなかった。まあ5歳の私が考えるこ

とだから、そんなこと。絶対あの B29、エノラ・ゲイという飛行機の人たちをこの私が見つけたし、この私が敵を討つ。でも1つ問題もあります、親。父親は牧師、それを知ったらきっと、ちょっとあなたいらっしゃい、と座らされて聖書を持ってきて、「ほら、イエス様がこうおっしゃっているでしょう」なんて言われて、説教を聞かなきゃいけない。「うわ、それだけはしたくない」と思い、これはちょっと誰にも言わないと心の中に一旦おさめました。

でも面白いね、人生って。1955年、ニューヨークにあるマウントサイナイ病院から父に手紙が来て、我が病院は整形外科で色々とケロイドの手術もしているので、是非我々に手術をさせてください。ただし、今我々ができるのは25人の方たちだけ、ということで25人を広島で選びました。心や身体にまだ他に病気があって手術に耐えられないような人は、悪いけれどもちょっとご辞退させていただいて、手術にどうか耐えられる人だけ25人のお姉さんたちが選ばれました。そもそも父が発案したので、もちろん父はエスコートとして飛行機に乗りました。そして広島のお医者さん2人か3人、当時まだそういう手術はしていなかったのでお医者さんたちも一緒に行って、その手術を見て学びたい、そして通訳が岩国基地からアメリカの軍用機に乗りました。1955年その当時は飛行機の25人の費用を出すようなお金はありません。それで向こうがどうぞお使いくださいということで、その軍用機に乗ってアメリカへ行きました。

次の日、母がアメリカからの国際電話を受け取りました。うちには電話機がなかったもので、戦争が終わって10年も経ったので、広島女学院の宣教師の先生方が日本に帰ってきていました。母はその人たちの中で1人電話機を持っていらっしゃる人に借りて、アメリカと話をしました。相手の人は、「谷本さん、明日の飛行機でアメリカに来てください。ただしこれは誰にも言わないでください。ご主人には絶対言わないでください」いや、何かね、誘拐されるのか何なのかよく分からないけれど。母はどうしていいのかわかりません。戦争が終わって10年目、日本では大きい町にはアメリカ文化センターという所ができました。まず大使館がある、その下に領事館がある、そしてアメリカンカルチャーセンター、広島にもそのアメリカンカルチャーセンター、アメリカ文化センターができていたので、その館長さんと父は交流があったので、思いきって相談に行くことにしました。館長さんは全部その話をご存知で、母に対して「谷本さん、もう心配しないで行ってください。この番組はとってもいい番組で」そう言われて初めて、その呼んでくれる人がテレビ局の番組の人だったということが分かりました。

子供が4人、私が10歳、弟7歳、下が4歳と2歳。母はお金がなかったので、下の2人を連れてすぐ東京に行きました。私とすぐ下の弟は小学生なので、おばが付き添ってくれました。昔は鈍行電車で東京まで行くのにずいぶん時間がかかりました。そして東京で母に会って「お母さん、パスポート貰えた？」と聞いたら、母が説明してくれました。パスポートの申請に行って、パスポートを申請したいと言ったら役所の方がパスポートは1日ではできません。でも貰わなきゃ、飛行機に乗らなきゃいけません。どうしようか迷った結果、言ったらいけないと言われていたけれど、この場合はもう猶予がないと思って、実はアメリカから国際電話が入っていて、その日が次の日になっていたので、今日の夜の飛行機でアメリカに行かなきゃいけないですと言いました。受付の人は「ああ、はいはい、ちょっと待ってください」そして、他の方が急いでフロントに来てくださって、手にはパスポートがありました。「お待ちしていました、谷本さん、これがパスポートです」パスポートはもうできていました。ということは、生意気な5年生の私です、「はあ、日本は負けた国、アメリカは勝った国、きっと勝った国が負けた国に向かって、この人たちにパスポートを出せと命令したからできたんじゃないのかな」などと思いました。とにかく、飛行場に行って飛行機に乗りました。皆さん、海外旅行に行った時にパスポートを見せたりしますよね。母のパスポートを見たそのお役人さんがニコッと笑って「元気で行ってきてください」。なぜあんなに微笑んで言ったのかと思って飛行機の中でパスポートを見たら「テレビ出演のため」とありました。だから、よっぽど我々がすごい役者か何かだと思ったんだろうと思いました。ハワイで給油している間はみんな降りるんですが、谷本家は降りてはいけない、飛行機の中でじっと給油されるまで待っていました。実を言うと、父とそのお姉さんたちはまだハワイにいたわけです。誰かが我々を見て、子供が4人いるから目立ちますよね。それが谷本家の子供だと分かったら、それが父の耳に入ったらもう番組がおじゃんになる。だから、とにかく飛行機会社も私たちは外に出させない、飛行機の中にいるようにということでした。

忘れられないのは、1955年5月11日、大きなテレビ局のホール。私は弟・妹を連れて、舞台の裏にある部屋で自分たちが出るまでそこで待機していました。ちょっとドアを開けてみたら大きなホールにお客さんがいっぱい、これで何かが始まるというのが分かりました。実はこの番組の名前は“*This is Your Life*”、これはあなたの人生だ、その後に“*Kiyoshi Tanimoto*”、ということは父のショーが始まるということが分かりました。あとで私も分かったんですが、この番組は、皆

さん今日はちょっとある程度お歳を召していらっしゃる方が多いので、ちょっと嬉しいんだけど、なぜかと言うと、昔NHKが「私の秘密」という番組をやっていましたよね、覚えていますよね。そう、実はあの元の番組です。アメリカでは、1人の人の人生で出会った人と舞台の上で会うんです。それで我々もやっと呼ばれて舞台に上がるのですが、その番組のハイライトは、私の父が、あの1945年8月6日広島にいた、そしてもう1人父が会う人、出ていらした方はキャプテン・ロバート・ルイスという、あのエノラ・ゲイの副操縦士でした。彼はあの日、同じ広島だけど父は地上、このキャプテン・ルイスは空の上の飛行機にいた。この2人が人生で出会うわけです。

キャプテン・ルイスは8時15分、ターゲットは広島。それも日本には橋に全部名前があるけれど外国の人はその日本名の橋の名前を覚えるのは難しい。でもその橋はちょうど空から見たらアルファベットのTの形をしているので、その軍の人たちはその橋のことをTブリッジと名付けて、8時15分にTブリッジから爆弾を落とします。でもその時の計算ではそこに落ちる予定だったのですが、本当はそこに落ちませんでした。近くの島病院の上に落ちました。この2人が人生で初めて出会ったんですね。司会者がキャプテン・ルイスに、あなたは爆弾を落とした後どう思いましたか、と聞きました。私も詳しい英語は分からないけれど、簡単な英語はどうにか分かりました。キャプテン・ルイス曰く「8時15分爆弾を落として、そこをすぐ離れた。なぜなら飛行機がどうなるか分からないので、とにかくその場を逃げた」でも、彼らにはもう1つ命令が下っていました。その命令は、落としたものの威力がどうだったのかきちんと見てくるようにというものでした。エノラ・ゲイは再び広島上空に来て、窓から広島町を見ました。広島が消えていました。彼は副操縦士だから何かメモを取るような紙を持っていたんだと思うのね。例えば何時何分、緯度何度経度何度、どこどこ通過などと全部メモしていたのだと思います。そのメモ帳に彼は“My God, What have we done”(神様、私たちはなんてことをしたのでしょうか)と書きました。そう言った時、私は彼をずっと睨みつけました。だって敵なんですから。ところが、神様私たちはなんてことをしたんでしょうと言ったあと、睨みつけたそのおじさんの目から涙がポトッと落ちました。私はとてもショックでした。敵だから、そのおじさんの目から涙が出た。鬼だ鬼だと思っていて、「鬼が涙を流すという話は聞いたことないし、いやちょっと待てよ、この人鬼じゃない、私と同じ人間だ」ということに、その時気がつくわけです。大人たちが難しい話をしているのは私には分からない

けれど、私はお客さんがみんな見ている中で自分の心の中を覗いてみました。「いやあ、私も悪いところがいっぱいあった。親の言うことを聞かなかったこともあった。弟と喧嘩したらいけないって言われているのに喧嘩した」悪いことがいっぱいいっぱい頭に浮かんできました。そして、心の中で「ごめんなさい。神様ごめんなさい」そう思うのが精一杯でした。

一番最後は、弟・妹たちは父に会えたから嬉しくて、父にかじりついていました。だから司会者のおじさんが私に、今日は多くの方がこの番組を見に来てくださっているから、コウコ（紘子）はお父さんの代わりにみんなに挨拶するように、と言われたので仕方がない、嫌だとは言えないから舞台の前まで行って皆さんに手を振りました。そして、そのあと私がとった行動は、彼をずっとやっつけたいと思って嘔みついて蹴飛ばしたりしたいと思っていたその彼の涙を見たあとから、なんでそんなことを思っていたんだろうと悔い、キャプテン・ルイスの横へそっとそっと蟹のように横歩きましたのです。そしておじさんの横に立ちました。どうしていいかわからない、そっとおじさんの手に触れました。それが、その時私にできる精一杯の“ごめんなさい”。そうしたらそれを知ったキャプテン・ルイスは、顔は正面のお客さんの方を見ながら私の手をしっかりと握ってくれました。私はやっぱりこの人に会えて本当に良かったと思っています。

ある程度大人になった時、新聞で彼が亡くなったと知りました。実を言うと、いつか大人になっておじさんに会って、あの時の私のことを話したいと思っていましたけれど、その前に亡くなられました。最初に私が思ったのは、あの広島に慰霊碑があります。その真ん中には石でできた大きな箱、その蓋を開けると中にはノートがいっぱい収められています。それは原爆で亡くなった人の1人1人の名前が書かれています。これは毎年、被爆者で亡くなった人の名前を追加しています。キャプテン・ルイスも亡くなった、そしてその石の外には言葉が刻まれています。「安らかに眠ってください 過ちは繰返ませぬから」私はこの言葉が大好きです。広島大学の教授が考えられた言葉ですね。私は大好きです。キャプテン・ルイス、どうぞ安らかに眠りください。私たちは二度とあのようなことはしません。

でも今世界は、毎日ニュースを見ながら、ニュース見るのが好きですが、もう戦争のニュースだけは見るのが辛いです。私が小さい時から父は私にこう言いました。「町内で生き残った赤坊はお前1人だからお前は将来、広島のため、世界のために、働くような人間に育ててほしい」。言われれば言われるほど、「私はやり

ません！」ずっと嫌がっていました。30歳になった時に結婚しました。そう、相手は無神論者、一番いいよね、教会に行かなくていい。無神論者と結婚したのに、人生面白いよ。実を言うと、その人が牧師になっちゃった！あれだけ牧師の奥さんにはなりたくなかったけれど、結局私も40年間牧師の奥さんとして教会に育てられました。私はずっと父に「私はやりません、やりません」と言っていたけれども、父は流川教会に40年間牧師として携わりました。そして最後の説教は、もちろん聖書の中から話をしましたが、最後になぜ彼が広島に一生懸命になったのかの話があり、これはちょっと聞いておかないとまずいな、と思って聞きました。あの8月6日、山の上から広島を見た、もう火があちちでもこっちでも上がっていました。一時期彼は、自分の教会がどうなったか見たいという気持ちであの山を降りたと言っていました、本当はそうではありませんでした。あの山の上から広島町を見て、火があちちでもこっちでも上がっているのを見て、彼が最初に思ったのは、娘はどうしただろうか、妻はどうしただろうか、教会員はどうしただろうか、町内の人たちはどうしただろうか。その思いはずっと頭の中を巡り、彼曰く「ずっと私はそれを思っていた」。ということは、自分は自分の家族、自分の教会、自分の町内のことしか考えなかったのです。山を降りた時、多くの人が「助けて、助けて」と叫んでいました。助けられる人は助けたいけれども、家の中に挟まっている人を1人では到底助けることができませんでした。「ごめんなさい、お許してください。引っ張り出すことができないんです。ごめんなさい」そう言って逃げました。自分は、牧師としても本当に最低の人間だという“regret”悔いがものすごく残ったという話を聞いて、「お父さん、だから忙しかったのか」とやっと分かりました。彼には直接は言わなかったけれど、私は40歳になって彼が歩いた道を歩いていきたいなと思い、今、歩いています。

ここに新聞があります。私の大好きな人、誰か分かる？ オバマ大統領。実は東京のNHKから、オバマさんがどうも日本にいらっしゃるみたいだから、悪いけど広島まで行ってもらえないだろうかと頼まれました。その時はまだ関西にいたものですから、「喜んで行くわ」と広島に行きました。そしてNHKの人たちとオバマ大統領のスピーチを聞きました。2つパソコンを置いて、1つは英語だけ、1つは日本語だけ流れます。そして嬉しかったね。聞き始めました。「心配でしょ、みんな。近藤さん、これ全部読むつもり!? 我々家に帰れないじゃない」「大丈夫。そこはあんまりしない」オバマ大統領の言葉をちょっと言わせてもらいます。

“Some day the voices of the Hibakusha will no longer be with us to bear witness. But the memory of the morning of August 6, 1945 must never fade.” 「いつか証言する被爆者の声が聞けなくなる日が来るでしょう。しかし1945年8月6日の朝の記憶を薄れさせてはなりません」 そのあとに、いろんな他の人のことをお話しになりました。“We see these stories in the Hibakusha: the woman who forgave a pilot who flew the plane that dropped the atomic bomb because she recognized what she really hated was war itself.” 「私たちはこうした物語を被爆者の中に見ることができます」 ちょっとここで触れたいんですけど、この「被爆者」という言葉を外国の首相などが使ったのは、きっとオバマさんが最初じゃないかと思います。もう1回そこを繰り返します。「私たちはこうした物語を被爆者の中に見ることができます。原爆を投下した爆撃機のパイロットを許した女性がいます。なぜなら彼女は本当に憎いのは戦争そのものだと分かっていたからです」 そうしたら、周りにいたテレビ局の人が「絃子さん、絃子さん、オバマ大統領が絃子さんのこと言ったじゃないの」と、私は「いや。彼は私の名前を言わないから、あれは私じゃない」と。「いやいや、あの話は絃子さんしかいないです」「いやいや。私の名前を言っていない」とよく揉めていたんです。私も友達が多いんです。中には悪友と言われるような人もいますが、最近、その人がアメリカの大統領のスピーチライターと出会って、その人に聞いたそうです。オバ大統領が広島にいらした時、長いスピーチをしたんだけど、あのスピーチの中で確か誰か女性の話をしたけれど、あの女性は一体誰なんですかと。すると彼が「ああ、あれだね、分かった。あれは絃子という人がいてね」と言ったそうです。彼女は自分の思っていたことが当たったと大喜び。でも、オバマ大統領から聞いていないから、私は違うと思っています。

広島と長崎には ABCC (Atomic Bomb Casualty Commission: 原爆障害調査委員会、現・放射線影響研究所) がありました。そこは病院ではなく、研究所です。被爆した人たちがどういう風に身体に影響があるのか調べる所です。私も被爆したので ABCC から1年に1回呼び出されます。学校の先生から、何月何日校門にステーションワゴンが来るのでそれに乗って ABCC に行くように、と言われました。私のことだから「はい」と元気に答えました。だって堂々と学校をさぼれるんだから。まず行くと、男の子も女の子も一緒、男性も女性も一緒、洋服は全部脱いで綺麗にアイロンがかかった木綿のガウンを着せられます。実は、とても私

が嫌だったのは下着も取って、確か1人のお姉さんが教えてくれたんだけど、「絢子ちゃん、あれ確か紙でできてたよね」と言うので、「ちょっと私そこまで覚えてないわ」と言ったんですが、それを着けてガウンを着て検査室から検査室に渡ります。でも、小さい頃はあまり嫌じゃありませんでした。なぜなら、食べる物がない時代にそこに行って検査を受けると、最後にミルクとかクッキーとかが出されるのです。食べ物がない時にやはりそうした美味しい物が食べられたのは嬉しかったです。ところが中学になって、中学校でも同じように先生が、何月何日学校にステーションワゴンが迎えに来るからそれに乗って行くようにと。また「はい」と返事をして、堂々とさぼれるんだから。ABCCへ行くと、今までやっていたことと同じようにいろんな検査を受けます。ある時、中学1年だったか2年だったか3年だったのか覚えていません。先生が、「谷本さん、今日はちょっと違うことをやってください」と言うので「はい」と元気に答えたら、その部屋に行ってくださいと連れて行かれました。そしてドアの外に立ったら中からいろんな言語が聞こえてきました。生意気な私は「あ、これはフランス語かな。違う。これはドイツ語かな」なんて勝手に思いを巡らしていました。先生が、どうぞ入ってくださいと言うので入りました。窓のない、かまぼこ型の家で外からの光が入っていません。その部屋には舞台があって、スポットライトが舞台を照らしていました。舞台の後ろに白い壁に黒い線が書いてありました。だから、私とその前に立てば身長はどのくらい、横側はどのくらい、先生方でしたら一目瞭然にすぐ分かります。そうしたら先生が、「谷本さん、ガウンを脱いでください」と言いました。ガウンを脱いだら下着1枚。もう腹が立って、なんで私はそんなことをしなきゃいけないのか、私が爆弾を落とすわけじゃない、なのになんで私はこんなことをしなきゃいけないのか。お医者さんに言われた通り右向け右、左向け左。天井を見ながら「神様、助けてください。助けてください。ここから私をすぐ連れ去ってください」と祈ったけれど、祈りがきかれなような気がしました。その日は、いつもあんなに喜んで食べていたクッキーも食べずに帰りました。

その日のことを私は親に言えませんでした。親は、特に父親はアメリカで教育も受けたし、アメリカの本当に心ある人たちからは、例えば粉ミルク、子供たちにとって、また赤ちゃんにとってミルクは必要、送ってきてくれたりしていました。私はそんなアメリカの人たちの思いをよく知っていたので、お父さんにもお母さんにも言えませんでした。でもずいぶん年月が経って、ある日、流川教会へも東京から修学旅行の学生が来ました。みんなの学生服を見た時、中学時代のあの日

のことを思い出しました。そして、その ABCC の話をしたあとにハッと気がつきました。一番後ろの席に母、父、結婚した相手が座っています。「ああ、言ってしまった」それで3人の横を通った時、私がニコニコしながら通ったら3人とも目をチカチカさせていて、「ああ、失敗した。言うんじゃないかった」と思って通ったのを覚えています。

やはり私としたら、この80年間第三次世界大戦がなかったのは、それは良かったんですけども、今の世界を見たら、日本は広島・長崎を体験しているのだから、やはり日本が先頭に立って核の廃絶を言わなきゃいけないと私は思っています。世界の人たちに話す時、特に東南アジアの方と話す前は、私は日本人ですから、日本軍がどういうことをしたかということを読んで知っていますので、まず最初にそのことに関してご家族で辛い思いをしていらっしゃる方がいた場合、どうぞお許しくださいとお伝えください、と言ってからでないと話ができません。やはり私としては、次の時代を担っていく子供たちに、本当に平和に生きていってほしいなと思っています。

今日は皆さん大人の方でいらっしゃるので、ちょっと面白い話をさせていたでいて終わりにします。ある小学校に行きました。6年生が修学旅行で広島に行くということで呼ばれて行きました。この頃の小学校は質疑応答の時間があるんです。いろんな質問をします。答えるのが難しいような質問もします。まだちょっと時間があるから最後にあと1人、質問があるんだったら手を挙げてくださいと言ったら一番後ろに座っている男の子が「はい」と手を挙げました。「いや、この子は何を聞いてくるのかな？」いつも難しいことを聞いてくる子が多いからどうしようかと思いました。そして、その子は立って「次に僕が手をあげた時、近藤さんのことを思い出するようにします」それで終わりです。「ええ!？」何を言いたいのかちょっと分かりません。そこでベルが鳴りました。ベルがなったら給食が食べられるので、みんな走って出て行ってしまいました。「うわあ残念だったな」何を私に言いたかったのか分かりませんでした。どこの学校でも終わったあとは校長室に呼ばれて、6年生の先生たちが挨拶に入っているから、ちょっと先生とお話をして帰ります。私は、男の子が何を言いたかったのかということがすごく気になりました。それで、そうだ、もしかしたら先生方が何か教えてくれるかもしれない、と思いました。あの最後の男の子は私に何を伝えたかったのでしょうかね、と聞きました。1人の先生が「はい、あの子は私のクラスです。ちょっ

と問題児なんです」問題児とは？と思ったら、実は彼が言った「次に僕が手をあげた時」は、こっち（挙手）じゃなかった。こっち（暴力を振るう）だった。「次に僕が手をあげた時、近藤さんの顔を思い出すよ」彼もきちんとキャプテン・ルイスの話を聞いていてくれたんだな。今は彼が毎回私の背中を押してくれているような想いです。

次の時代を担う子供たち、子供たちを連れて世界の首相や大統領に、子供たちが自分たちが願っている社会・世界はこうなんですと言って回っているグループがアメリカにありました。そこに私は25年ぐらい関わっていましたが、やはり戦争を乗り越えてきた子供たちというのは強いですね、説得力があります。日本はそういう意味では、海に囲まれていますから違うんですけど、あの子供たちに私は多くのことを学ぶことができました。私の学生時代の友達は全部アメリカ人なので、そういう話をするのですが、核のない世界を作るには日本が代表して、広島・長崎を経験しているんだから、世界にあれは使ってはいかんということを言わなきゃダメなんじゃないのか、と言います。それを聞いた私が、「いやあ、でも日本はアメリカの傘の下にいるということで」と言うと、「それとこれとは問題が違う！それはそれ、これはこれ」日本はやっぱり広島・長崎を体験しているんだから、世界に向かって二度とあれを使ったらいけないということを言うべきだ、と言っています。私も本当に子供たちのためにもそうあって、そうなりたいなと思っております。今日は長い間本当にありがとうございました。

最後にちょっとこれだけお見せしたいと思います。親ってすごいね。父親に対して「いや、私は広島のことなんか語りません」と堂々と言っていた私。何だと思いませんか？小学生に聞くと「それ下着？」って聞き返します。いや、これは私のドレスだ。8月6日、そして他のものは全部焼けたから、きっとこれを毎日着ていたんでしょうね。親はこうやって取っておいてくれて、40歳の時に受け取ることができました。ありがとうございました。